

平成 16 年度「教育研究支援プロジェクト経費」成果報告書

プロジェクトチームの代表者 部・講座等名 第二部・総合学習開発講座
氏 名 山崎洋子

プロジェクトの名称	学生主体の遠隔教育システムを用いた 大学間連携授業の試行とその分析	配 分 予算額	750,000 円
プロジェクトの概要	本プロジェクトは主体的人間の育成を念頭におき、これまで近代学校が持ってきた教育体制から、すなわち、あらかじめ「教える－教えられる」関係があり、コンテンツ（学び－教える内容）が決められており、基本的に授業は教室内で処理され、決められた授業時間のなかで完結される、という<u>伝統的学びの体制から解放された中で、学びはどう組織されるのか、また人間の内的変容の生起にはいかなる要因があるのか、などに関して試行的・実践的に明らかにした。</u> 具体的には、本学と京都大学高等教育開発推進センターとの間で、遠隔教育システムを利用した連携演習授業（大学院：教育実践研究方法論Ⅱ）を試行し（二年目）、同授業受講者の学習行動分析及び同授業を行うためのハード及びソフト両面の条件整備とそれらの分析・考察を行い、<u>既存の枠組みを超えたところに成立する学び論の構築のための状況や条件の析出と理論的枠組み・視座の構成を目的とした。</u>この授業は、両大学においてネットミーティング及びテレビ会議システムを使用して同期で行われるとともに、Webページを通して非同期意見交換も併せて行われた。それゆえ、そこにおける授業の生成の状況についての、観察・記録・分析が上記の目的達成の基礎資料となった。 （実施過程） ① 受講生の間でいかに授業内容が生成されていくのか、それに対して教員がどのような指導を求められるのかを実践的に試行し記録した（ビデオ録画及びチャット、ホワイトボード、メモ帳の保存）。（4－8月） ② 上記の作業は、本授業Webページにおける学生、教員の活動についてもなされた。Webページにおいて、同期授業で展開された内容、論点につき、受講生がどう反応し、授業担当者・教員としていかなる介入を求められるかを観察・分析した。（4－8月） ③ インターネット及びテレビ会議システムの安定性、授業への使用適合性も実践的に検証した。（4－8月） ④ 全授業を振り返る時間を設け、受講生・教員の双方で意見交換した。（7月） ⑤ 記録の検討、理論的枠組み・視座の析出（9月－2月） ⑥ 全国学会発表（平成16年度 情報処理教育研究集会）（11月） ⑦ 紀要論文投稿（『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』）（12月） ⑧ 京都大学と鳴門教育大学のスタッフ計10名で研究成果の交換及び平成17年度の本授業の推進方法について議論した（2月）		
成 果 の 概 要	（学会発表） ① 曾根直人・村上正行・神藤貴昭「テレビ会議システムの構築と運用」平成16年度情報処理教育研究集会 名古屋大学（11月27日） 概要：本授業で用いた、フリーソフトのネットミーティングとオープンソースのH.323ゲートキーパーとの組み合わせによる安価で安全なテレビ会議システムの構築について述べた。また、ミキサーを使用してネットミーティングに入力する方法により、ハウリングが防止され、より自然な会話でのディスカッションが可能になることを明らかにした。 ② 谷村千絵・石村雅雄・山崎洋子・三宮真智子「情報教育における学びの質－京鳴バーチャル教育大学（KNV）の授業から－」平成16年度情報処理教育研究集会 名古屋大学（11月27日） 概要：本授業の記録分析から、不慣れなツールの使用という一見マイナスに見える状況が、学生の内面にコミュニケーションへの懐疑的でクールなまなざしを惹起していたことを明らかにし、それによって「教科型の情報教育」とは質的に異なる「コミュニケーション重視の情報教育」としての学びが生起していたことを指摘した。 （論文） ① 谷村千絵・三宮真智子「情報教育におけるコミュニケーション能力の育成－京鳴バーチャル教育大学（KNV）の実践から－」鳴門教育大学情報教育ジャーナル 第2号 鳴門教育大学情報処理センター 2005 pp.77-81. 概要：本授業において、受講生はツールの使用技術を習得するだけではなく、コミュニケーションそのものを反省的にとらえ直す、メタ認知も生起させていた。本稿では、コミュニケーション能力に不可欠なものとしてとらえられるメタ認知を促す授業要件について考察した。非指示的な教員のかかわりによって、遠隔コミュニケーションの諸々の不具合を排除・克服の対象としてみるだけではなく、それらをまず直視し、考え、改善への手立てを模索する姿勢が見られていたことが、重要な要因として示唆された。		